

## [研究紹介] カムチャッカ半島東部の津波痕跡

- The International Workshop “LOCAL TSUNAMI WARNING AND MITIGATION” 2002 参加報告 -

独立行政法人産業技術総合研究所 海洋資源環境研究部門 七山 太

Tsunami deposits around the eastern coast of Kamchatka (review) : reports of The International Workshop  
“LOCAL TSUNAMI WARNING AND MITIGATION” 2002

NANAYAMA, Futoshi

Institute for Marine Resources and Environment, Geological Survey of Japan, AIST

9/7-9/17, 2002, ロシア共和国カムチャッカ州ペトロパブロフスク市の極東科学アカデミー火山研究所において, 国際津波ワークショップが開催された. このワークショップには, ニュージーランド, インドネシアを含め, 10ヶ国以上の代表の参加があった. 本邦からは東大地震研の都司先生と私を含めた4人が参加した. 発表者の大半はロシア人の津波研究者であったが, 研究レベルは世代に確実に比例していて, 若手~中堅の研究者は米欧研究者と同レベルのプレゼンを行っていたし, 比較的英語も堪能であった.

ワークショップ最終日にペトロパブロフスク市郊外の津波堆積物巡検が行われた. 巡検案内者はワシントン州立大学のジョディー・ブルジョア教授であり, 彼女は過去5年間に渡り, 毎年夏にはカムチャッカに渡航しロシア人女性研究者ターニア・ピネジーナ氏と共に調査を行っている. カムチャッカ東岸は現在も対米軍事機密地域であり, 民間人の立ち入りは厳しく制限されている. 巡検中も多数の軍事施設の中をバスで通過した.

彼女たちは, 軍関係者の全面的な協力を受け, ヘリコプターを用いた調査をカムチャッカ半島東岸で広域に実施し, 著しい成果を上げている (Pinagina and Bourgeois, 2001). 彼女たちの研究対象は, 私たちが道東太平洋沿岸で見ているイベント堆積物の産状と実に良く似ていた. また, 火山灰を時間面として用いた研究手法も同じであった. 但し, イベント堆積物の層相や粒度組成, 微生物遺骸を用いた供給域の検討などは一切行っておらず, 単純に泥炭層中の砂層の枚数を数えている結果のようであった. 彼女たちの

論じているような過去8000年間における約40枚の砂層の成因が全て津波遡上によるものか否かについては, 更なる証拠の提示が必要に思える.

今回の私の渡航目的は, この巡検参加以外にもう一つあった. それは, 近い将来, 北方領土を含めた千島列島 (サハリン州管轄) において日露共同津波履歴調査が可能であるかどうかの先方への打診であった. 幸運にも, ワorkshop期間中, サハリン科学アカデミー津波研究室室長のピクトール・カイステレニコ氏と幾度も話し合いを行う機会を得て, 今後, 相互に連絡を取り合って研究計画を立案することで合意した. サハリンの津波堆積物研究者も国後島において成果を上げており, 今回のワークショップにおいても2件の発表を行っていた. 彼らの研究グループはキチンと珪藻遺骸を用いた海成イベントの証拠も提示しており, 私も十分信用できた.

カムチャッカは北海道からは空路で2時間ほどの距離ではあるが, 現在日本からの直通便はなく, 行きも帰りも沿海州のハバロフスク市経由となった. ペトロパブロフスク市は原野の中に作られた25万都市で, 市民のほとんどは軍関係者, 港湾関係者及び漁業関係者で占められている. 市の周辺にもアバチャ火山をはじめ活火山が多く存在し, 湿原も多く, どことなく北海道東部と似た景観であった.

### 引用文献

Pinagina and Bourgeois, 2001, *Natural Hazards and Earth System Sciences*, 1, 177-185.